

ことばにおける世代間の断絶について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 秀太 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1407

ことばにおける世代間の断絶について

中川 秀太

1. はじめに

作家の柳田邦男氏（1936～）に「蚤を知らない世代へ」という一文がある。そこには、1967年生まれの息子が「ノミを見つけて「首のところに変な虫がいる。何だろう」と言ったのに対して、柳田氏が「なあんだ、蚤じゃないか」と答え、さらに息子が「蚤ってこんなもの？」と尋ねる会話が記されている。そこで氏は息子の生まれた年を考え「ろくに石けんもない戦中戦後、蚤や虱がいるのがあたり前の生活をした私などとは、まったく時代が違う」と述べ、さらに次のように指摘する（「虱」は「しらみ」）。

- (1) 蚤や虱のいる生活なんていうものは、こちらにとってはほとんどアブリオ（先験的）にわかっている事柄なのだけれど、息子たちの世代にとっては“知識”として教えられてはじめて理解できる物事なのだ。蚤一匹のことで、いちいちこんなことを考えたりするのは、たまたま最近、私が世代の違いによる意識や認識のずれについて、あれこれ考えることが多くなっていたからかも知れない。世代によるずれとは、ここでは、生きてきた時代状況の差や生活体験の差によって生じるものを、さしている。

ここでは、ノミという物事（「事物」「対象」などと称されるものを統一的に「物事」と呼ぶ）についての意識が問題になっているが、これはことばとの関係で言えば「ことばだけ知っていて物事を知らない」あるいは「「ノミ」ということばを表面的には理解しているが、深くは理解していない」というように言い表すことができる。柳田氏にとっては「ノミは」というように語りだすことのできるノミが氏の息子にとっては「ノミって」というように引用形式で表されるところにも、その差がうかがえる⁽¹⁾。以下で筆者は、主に戦後の日本を対象とし、以下のことを論じる。

甲：どのようなことばの断絶が存在する（した）のか⁽²⁾。

乙：どうしてその断絶が生じたのか。

丙：断絶が生じたとき、人はどのような気持ちをいだいたのか。

これらのうち、甲と乙は、古い日本語を論じる際にも追究すべき課題であるが、資料が多く残されている近現代においては、丙の追究が重要であると考えられる。以下で見るように、人はことばが相手に通じないと感じたとき、嘆き悲しむことが多い。彼らにとっては、簡単にことばの変化とひとくくりしてくれるな、という場合も少なくない。そのようにくくろうとする筆者みずからに対する戒めの意味も込め、本稿では

「変化」ではなく「世代間に見られることばの面における何らかの通じにくさ、感覚の違い」という意味で、「断絶」を統一的な用語として用いる。

2. 品詞別に見た断絶の諸相

筆者は、明治以降の言語学者、日本語学者、国語学者、作家、役者、編集者といった肩書きで呼ばれる人たちが書き残した文献を調べ、A4(40字×35行)で約700ページほどのワードファイルに世代差の見られる表現としてまとめている(600人弱の書き手)。これを「ことばの世代差に関するデータベース」(世代差DB)と呼ぶことにし、彼らが「通じない」「今の人は」「昔は」といったキーワードを用いている部分を抜き出し、品詞ごとに分類すると、次の表のようになる。

表1 品詞別に見た断絶の内訳

品詞	名詞	動詞	形容詞	副詞	感動詞	文末表現
項目数	256	7	7	2	3	1

※いわゆる品詞の範囲から外れる「文末表現」も便宜的に用いる。サ変動詞語幹は名詞に含める。

この表から明らかなように、大多数を占めるのは名詞である。名詞には「火鉢」のように事物を表すものが多く、その物が使われなくなったとき、それを使っていた人は郷愁の念をいだきやすい。その名詞についての言及は、①物事が廃れたことを指摘する場合、②物事の衰退とともにことばも衰退する場合、というように分けられる。ほかの品詞には見られないことである。ここでは名詞以外のことばについて、具体的にどのような動きがあったのかを検討し、名詞は3以降で考察する。

2.1 動詞

たとえば「寝る」の敬語に「およる」という動詞がある。1968年8月7日の朝日新聞で大石初太郎(1911~2003)は「およる」が通じたのは20年、30年前の話であって「今では「お夜」の動詞化したこのことばを使うのは、ごく少数の特別な老年女性ぐらいのものだろう」と述べている。「今では」「老年」といった語が断絶を探るキーワードとなる。「おくれ(ちょうだい)」「押し詰まる」「考える」「流れる」「やにさがる」なども同様である(「押し詰まる」については後述)。使役表現の衰退もここで取り上げる。仮に近世を封建社会、明治から敗戦までを準封建社会、戦後を民主的な社会というように分類すると、戦後は(準)封建社会において用いられた「身分」の違いを感じさせる表現はさけられるようになる。作家の三浦朱門(1926~2017)は「東京でオーダーマイドをするときに、「作らした」「作らせた」という言い方があったのですが、いまはそういう使い方は絶対にしません。そういう、作る人を見下したよう

な感じになる言い方が全然なくなってしまっていて…」と発言していた(三浦ほか(1989))⁽³⁾。重要なのは、使役表現を使う人に、実際に見下す意識があるうがなかるうが、表現として「見下したような感じ」が出るのであれば、それは使うまい、使わせまいという意識が特に戦後になって目立ってきたということであり⁽⁴⁾、自然な言い方としてそれを覚えていた人と、そうではない人との間には断絶が生まれる。

2.2 形容詞

「けんだかい(高慢)」を「三十代の記者で知らないのに何人か会ったので」驚き(玉川(1977))、日常的な形容詞の移ろいを痛感する。自分たちにとってはなじみのあることばであっても、下の世代が使うのを見聞きしなくなりつつあれば「しんきくさい」は今日ではもう半ば廃語になってしまったようである」と悲嘆する(高橋(1981))⁽⁵⁾。時には、その語を使う生活が縁遠くなり、語形に対する誤解が生じることもある。「つましい(質素)」は「私の母たちの世代には大切だった「つましい」「しまつ」なども若い人には無縁の語」となり(寿岳(1995))、「つつましい(遠慮深い)」との混同が起こる(1977年8月8日の朝日新聞、書き手は百目鬼恭三郎(1926~1991))⁽⁶⁾。戦争(第二次世界大戦)を経験していない世代については、次のような話がある。原爆症に苦しむ女性が主人公のドラマ「夢千代日記」(1981)を見て子どもが「「クライ…」を連発する。はては「なんてクライんだ!」と両手で顔をおおう。中年としてはそれがどうした、という気分である」(斎藤(1984))とあるのは、平和な明るい時代の子どもならでのことであり(幸か不幸か21世紀の現在は単純に「平和」「明るい」時代とは言えなくなっている)、親の言うことなど聞きたくもないから「距離をおきたいものに片はしからクライのレッテルを貼り歩いている」(同上)⁽⁷⁾。高井有一(1932~2016)の『時の潮』という作品には「経済の高度成長期にさしかかり、何事も明るいのが良しとされるようになった時代の風潮も、今中のような男には不利に働いたであろう」と、「明るい」になじめない人物のことがえがかれている。

戦後の経済至上主義の日本においては「恥ずかしい」の中身も変化する。それを理解するうえで沢村(1990)の次の指摘が参考になる。

- (2) 「恥ずかしいって言ったって、昔と今じゃ中身が違うからねえ」三十年ほど前、八十四歳で亡くなった私の母は戦後のこの国のめまぐるしい変りように、ときどき溜息をついていた。「この頃は、お金が沢山あって、旦那が有名で、子供が上等な学校へ通ってなけりゃ恥ずかしいって言うらしいね。でも皆そうなるってのは無理だよ。人間にはそれぞれ皆、持って生れた福分——運があるんだからね。それがわかっているのに、つい慾につられて、人をだましたり、突きとばしたりしてしまう。恥ずかしいっていうのは、そういうことじゃないのかねえ。私はむずかしいことはわからないけど……」

戦前にも拝金主義者はいたであろうから、戦後に初めて上記のような「恥ずかしい」の使い方が生まれたとも言えないかもしれない。しかし戦争の終結によって、「国のために」という目的が一度、否定された以上、人びとは国にかわる何かのために生きていく必要に迫られる。それが個人の利益であったと考えれば、世代間の断絶が生じたことにも納得がいく。

2.3 副詞

「すこぶる」について1990年代に「四音節の「スコブル（頗る）」を使う若者は、相当珍しい（使用者は年配の人に限られる）のではないか」という指摘があった（間宮（1993））。正当な判断だと思われるが、テレビCMなどでは、広告効果を狙い、意図的に若者に「すこぶる」を使わせるというようなことがある（たとえば2010年代、ダイハツの車のCM）。

「いかほど」という副詞は、単独で「いくらですか」の意に用いた。しかし、戦後まもなく、その衰退が指摘される。1953年3月3日の朝日新聞に岡田八千代、辰野隆、中村通夫、七尾怜子、古川緑波、秋山安三郎、宮川曼魚による座談会の模様が記され、喜劇俳優の古川緑波（1903～1961）が「こないだ、年配の奥さんが買物をして「いかほど」って値段をきいたのを耳にして、感じがよかったですね」と言ったのに対し、随筆家の宮川曼魚（1886～1957）が「そうそう「いかほど」も言わなくなったな。物を返してもらった時に「おきんとさま」なんて、うちのおふくろなんぞいってたけども、今の子供には判らないな」と答える場面がある⁽⁸⁾。これは一般的な話として言えば「江戸語・東京語の流れで会話の中に用いられた（感じのいい）ことばが、戦後の東京において継承されにくくなった」という問題として捉えることができる。なぜ継承されないのかと言えば、江戸っ子が戦災により命を失ったり土地を失って東京を離れたりした結果、彼らの使う口頭語が戦後に東京に住み着いた人に伝わらなかったという事情がある⁽⁹⁾。「あいにく」が「おあいにくさま」の形であいさつのことばとして使われていたが、「今は「ないんですけれど」と言ふらしい」（市原（1962））という現象や、「このごろ買物中よくきく言葉に「おいてないですよ」というのがあります。たとえば食料品店へ行って「サラダオイルありますか」ときくと、店員が「おいてないですよ」という」（三国（1965））という現象が生じたところにも似た事情がうかがえる。三国は「おいてないですよ」には「何ともいえない冷たさがある」と評しているが、当の本人にしてみれば、必ずしも客に冷たくしているわけではなく、手持ちのことばで必要なことを伝えたまでであるとの言い分があるかもしれない⁽¹⁰⁾。

2.4 感動詞

「身分」にかかわることばの移り変わりが感動詞にも見られる。人を呼び止めると

きに使う「これ」である。「こら」はかろうじて生きているようだが、「これ」を使う現代人がいたら「お殿様？」とでもいった印象を与えかねない（「男はつらいよ 寅次郎と殿様」を参照）。元旗本の祖父を持つ社会学者の清水幾太郎（1907～1988）は、いわゆる士族の商法として竹屋を始めた祖父について語る際に、次のように述懐している（清水（2012））。

- (3) 趣味と商売との間には、言うまでもなく、深い溝が横たわっています。越え得ない距たりがあります。豆腐屋を呼ぶにも、「コレ、豆腐屋」と言ったとか、落語の材料になりそうな祖父であったという話ですから、趣味と商売との間の深い溝にも十分に気がつかなかったのでしょう。

時代錯誤であることを「落語の材料になりそう」と言い表している。

子どものことばにも変動があった。「あばよ」「はいちやい（さようなら）」の衰退と「バイバイ」や「じゃあね」の興隆である。仲田（1964）、小島（1970）、池田（1977）、植草（2005）が「あばよ」について⁽¹¹⁾、池田（1977）、玉川（1977）が「はいちやい」について、それぞれ言及している。

2.5 文末表現

『言語生活』に載った作家の円地文子（1905～1986）による随筆について金田一（1962）は「円地文子氏の随筆によると、今の若い人たちにとっては、年配の女の人が、……ダコトというとおかしく感じるようだ。いかにもと思うとともに、自分も年寄りに近くなったことを改めて感じさせられた」と述べている。自らにとって普通のことばが若い人、下の世代の人におかしいと感じられる事実を目の当たりにし、世代間の断絶を痛感する、という現象を端的に捉えている。このような事例は、後述する名詞の項目では、たびたび出現することになる。

3. 名詞における断絶

3.1 物事そのものの移り変わり

まず、ある物が使われなくなる、ある場所がなくなる、ある現象が珍しくなる、というように、物事そのものが特に東京において珍しいものとなり、時には、その物事を表すことばの衰退につながるという場合について検討する。「特に東京」と断るのは、今のところ東京が標準語の中心的使用地域として一般に理解されているからである。

3.1.2 生活から消えた物

たとえば「かまど」は、現代の生活からは消えていて、「かまど」自体を見る機会がほとんどない。昔は「一軒の家の台所には必ず竈というものがあつた」（小島（1970））。もっとも、「京都や奈良の古いお寺へ行くと、竈の名残りがそのまま残って

いる」(同上)というように、「(見学による)学習語」という形では「かまど」は下の世代にも継承されうる。「かや(蚊帳)」「キセル」「車井戸」「ゴム足袋」「除虫菊」「たばこ盆」「付け木」「ひのし(火熨斗)」「張り板」「赤ゲット」なども、生活の中からは消えて、ことばそのものも「古い」と感じられやすい。これらを使用した世代による指摘の例をいくつか掲げる。

- (4) 私は生返事をして、「七輪だとか十能だとか、そんなものも知らない人間の方が多いだろうな」と、一人言をいった。「それどころか、長火鉢を知らない。夫婦さし向いなんていっても、おそらく通じやしない。縦に小引出しが幾つ、その上に猫板があって、底に大引出しが二つ、銅壺が据っていてなんて、しがつめらしく説明したんじゃ一向面白くない。(永井(1976))
- (5) このごろ見ないものに「張り板」がある。「洗い張り」などという仕事も、もう家でする女性はないらしい。(同上)
- (6) 暖房具にしても、「火鉢」は都市では目にすることもなくなった。それに伴い「五徳」「火箸」「炭・木炭」「十能」もなくなった(「十能」は『三省堂国語辞典』にない)。代って、「ストーブ」「温風機」「除湿器」「加湿器」なども必要とされるようになった。(白藤(1993))

直線的に衰退するのではなく、一時的に復活するという場合もある。次に見る「付け木」がそれに当たる。

- (7) 付け木はマッチが普及するまでは台所の必需品でしたが、戦後、マッチが品不足で手に入らなかった時、一時復活しました。(林(1991))

また、日常からは姿を消したものの、特定の分野にかろうじて残っているということもある。「拍子木」や「たばこ盆」がそうである⁽¹²⁾。

- (8) 年寄りが仏壇の鐘をチーン、チーンと鳴らすのをたまにふと耳にしたりすると、他国で旧知に出会ったような気がする。鐘もそうだが、拍子木の音なども、近ごろでは相撲場で聞くだけになってしまった。(高橋(1975))
- (9) 煙草(たばこ)はいつこうになくならないが、たばこ盆(タバコボン)も煙管(キセル)も羅宇屋(ラオヤ)もほとんど消えて、今では歌舞伎の世界に生きるだけとなった。(秋永一枝「東京新聞」2008年1月23日)

ふとしたときに、そのことばを使って、下の世代との間に断絶があることに気づくことがある。それは「通じない」という経験によることもあれば、次のように、相手に別の語と誤解されて笑われるという経験によることもある。

- (10) “除虫菊”といたら、講演会で笑声がわいた、と疋田桂一郎は書いている。スプレー殺虫剤や電気蚊取りマットで育った世代は、それを“女中菊”と聞いたものらしい。(藤久(1980))

生活環境、より狭く言えば住宅環境の変化により、従来は普通であった家(部屋)

にかかわることばにも変動が起こる。「上がりがまち（上がりかまち）」などがその例である。

- (11) 見坊 その風俗の変化っていうことでは、例えば、上がりかまちに腰をかけて話をする、ああいう光景も想像できなくなってくるんですね、今のわれわれには。石綿 そうですね。そういう家がなくなっちゃって、公団住宅なんかになっちゃったわけですね。(石綿 (1979))

すべての家が集合住宅になったわけではなく、今も一戸建ての家などには「上がりがまち」はあるから、完全に廃れたというわけでもないが、かつてほど当たり前とは言えなくなっているのは、そのとおりである⁽¹³⁾。

- (12) リビング・ルームという言葉が日本語ようになって、日常の生活を過ごす居室の様子も、がらりと変ってしまった。ぼくのこどもの頃は、どの親戚に行っても、かならず茶の間には長火鉢がデンとすわっていたものだ。(戸板 (1962))

部屋の作りが変わったことに伴い、そこに置かれていた物が消えるという事例である。

3.1.3 縁遠くなった場所

特に東京にいる人にとって、身近ではなくなった場所というのがある。たとえば、今でも川や池は東京にあるものの、高度経済成長期以前に比べれば、確実に減っている。川は暗きよと化し、池は埋め立てられて、マンションなどに変わった。作家の村上元三 (1910~2006) は 1972 年に次のように記録している (村上 (1980))。文中、「がま池」とあるのは、東京都港区の池の名前である。

- (13) いまの東京の人間の中で、がま池など知っているのは、わずかで、関心は薄いだらう。しかし、ここ十年ほどで、東京の人間は川や池が次第になくなってしまふのを、そう気にしないように、慣れさせられている。

戦前には東京に牧場があった。たとえば作家の伊藤左千夫 (1864~1913) は 1889 年に東京・茅場町に牧場をひらいた。また、作家の吉村昭 (1927~2006) は、次のように書き残している (吉村 (1998))。

- (14) 私の家は、東京の日暮里町にあって、終戦の年の春、夜間空襲で焼きはらわれた。私は十七歳であった。その空襲で消滅した町のことも、質問に応じて話し、家の近くに牧舎があったことを口にする、四十年輩のインタビュアーが、「牧舎って、牛を飼っている牧場ですか」と、驚きの声をあげた。それは耕牧舎という名の牛乳精製の会社で、白いペンキの塗られた二階建の潇洒な建物であった。裏手に乳牛が繋がれている厩舎があり、かなり広い放牧場もあった。

インタビュアーの発言は東京に牧場があったのかという驚きを意味しているのであ

ろう。

1960年代以降、姿を消していく「原っぱ」について、そういう場所に加えて、ことばそのものに「原っぱなんていうことばがいまや懐かしい」という気持ちが記録されている（稲垣（1983））。あるいは、「牧場」「牧舎」に同様の気持ちを持つ人もいたことであろう。東京・早稲田にあった早稲田たんぼに象徴されるように、現在の山手線の内側に限っても、かつては田んぼがあり、上記のように、池や原っぱなどもあったので、東京と「いなか」とが連続していたとも言える⁽¹⁴⁾。そのことばの実感を生活の中で得るといこともできた⁽¹⁵⁾。しかし、これらが経済成長に伴い次々になくなっていくと、都会の人間は、そういったことばに対する感度が弱くなっていく。いなかを感じさせる要素がないのが都会であり⁽¹⁶⁾、そこにしか価値を認めたくないという人間にとっては、高橋（2001）にある、次のような指摘は理解するのが困難であろう（初出は1979年の『経済界』14-17）。

- (15) 私は大正五、六年の頃から夏になると千葉の外房の一漁村（今では大きな町になっているが）へ出かけて行く。（中略）しかし、世の中というものとは半世紀近くも経つと、昔の面影はもう殆んどない。^{かわ}滲らないのは波の音と夏空を流れて行く白雲ばかりである。緑が少なくなり、田畑が消え失せて、そのあとにはどこかの外人が言ったという「兎小屋」のような、没趣味極まりない新建材の家が立ち並んでいて、その上狭い道を自動車がやたらに通る。東京近郊と全く変らない有様である。これでは田舎にきた甲斐がないとつくづく思う。田舎があって、都会があって、それで人間の生活は釣り合いがとれるのである。どこへ行っても「都会」風では、人間息が抜けないし、田舎の人も都会ならではの面白味を味わうことが出来ない。呪わしい均一化、画一化である。生活全体に、食べ物に綾というものがないようになってしまい、全体がのっぺらぼうになってしまった⁽¹⁷⁾。

高橋の指摘の内容は、おおむね現在でも通用する。

なお、牧舎があったということは、牛の鳴き声が聞こえたということでもあるが、かつてはにわとりの声も東京で聞かれた。それがやがて「ふと、私は、都会から鶏の鳴き声が全く消えているのに気づいた」と記され（吉村（1998））、さらに「少年時代というと終戦前のことになるが、東京の下町に住んでいた私は、夜明けに遠く近く鶏の甲高い鳴き声をきくの常とした。最初に鳴くのが一番鶏、次が二番鶏、三番鶏などという言葉もあった」というふうに回顧される（同上）。亀井ほか（2007a）では「納豆売りや豆腐屋の声こそ、あまり聞かれなくなったが、焼き芋売りや金魚売りなど、物売りの呼び声はこのこっている」（同書の単行本は1964年の刊行）とされたが、今では「金魚売り」の声も廃れた。「焼き芋売り」は、たいてい録音した呼び声である。

3.1.4 評価の断絶

物そのものは現在も存在する。しかし、過去と現在とでは、その物の日本人にとっての価値が異なるという場合がある。過去の状況を体験している人が過去と現在とを比較したとき、その人は隔世の感をいだく。作家の永井龍男（1904～1990）は昔を振り返り、「扇風機」について「「なんしろ、あすこの家では、扇風機を使っているのですから」ことさら、そう云うほど、扇風機はぜいたくなものだった」と記録している（永井（1964）。「扇風機」が普及したのち、アメリカ文学者の柴田元幸（1954～）は「昔は、扇風機の風に当たりすぎるのはよくない、眠っているあいだずっと当たっていたりすると命を落としかねない、などと言われたものである」と回顧した（柴田（2018）※上記の箇所執筆は2007年）。

「バナナ」は、今では比較的安く買え、簡単に手に入る果物になっているが、作家の永井荷風（1879～1959）が1947年に「わたくしの若い時分、明治三十年頃にはわれわれはまだ林檎もバナナも桜の実も、口にすることが稀であった。むかしから東京の人が口に馴染れた果物は、西瓜、真桑瓜、柿、桃、葡萄、梨、栗、枇杷、蜜柑のたぐいに過ぎなかった」と述べているように、かつては一般的な果物ではなかった（永井（1986））。戦後では、秦（2018）に次のような記述がある。

- (16) (1956年)在京大使館のパーティーに出る機会もありました。中華民国(台湾)のパーティーは東京湾に在泊する船上でしたが、山盛りのバナナが積んであったのは、輸入制限のせいでメロンより高価だったので、日本人客が喜ぶのを知っていたからでしょう。「バナナの叩き売り」どころではなく、戦後初めて食べたバナナの味は忘れられません。

「煙」は、今は嫌なものだというのが一般的な評価であろうが、かつてはそうではなかった。吉村（1979）は、次のように記している。吉村昭は1927年の生まれである。

- (17) 私が小学校に通っていた頃の教科書には、「大阪は煙の都」と書かれていた。「煙の都」とは非難している言葉ではなく、工業のさかんな都会という賛辞の表現なのである。このような傾向は、戦後も引きつがれた。地方では、十年ほど前まで工場誘致運動がさかんであった。工場が出来れば、土地の人が職を得、しかも自宅から通勤もでき、人口の流出を防ぐことが期待された。それに、工場が設置されれば税収入が増し、地方財政が豊かにもなる。つまり工場誘致は、一石二鳥の利があると言われた。ところが、それが公害という思わぬものをひき起し、人々は苦痛を受けることになった。「煙の都」は、いまわしい都会の表現に変わった。

人に関することばには、過去と現在とで評価が変わったものが少なくない。たとえば「中学生」は、清水（2012）によれば、大正時代には義務教育ではなく、費用がかかったので、誰でも行けるようなところではなかった。中学生の「相場がかなり高かっ

たので、自然、本人の方も小インテリになったような気持ちでいたものです」とのことである。俳優の児玉清（1933～2011）は1964年頃のことを振り返り、俳優は「社会的地位がまだまだ低く、堅気の家庭では、俳優というだけで娘の結婚相手としてはまず失格」（児玉（2008））と述べていたが、その後、実力本位の芸能人やスポーツ選手の社会的地位は向上していく。「小説家」にも似た事情があり、江戸川乱歩（1894～1965）は、かつての状況を以下のように記している（江戸川（2006））。

- (18) 私の父母は、小説家なんて道楽商売で、それで一生暮らして行こうなんてとんでもない心得違いだと考えていた。「三文文士」という言葉が常用されているところで、私が「新青年」に投稿したりするのを、実に苦々しいことに思っていた。これが今〔昭和二十五年〕から三十年以前の常識であった。

3.2 ことばの移り変わり

3.2.1 語の交代

ここでは、物事は過去と変わらずとも、それを指すことばが変わっているという場合について見ていく。たとえば、「小皿」の意の「おてしょ」は、高橋ほか（1988）の(19)に見るように相手には通じなくなり、文章の中に使う際には、本間（2011）の(20)に見られるように注記が必要になった。

- (19) 高橋 それから、飲んでて考えたんですが、小さい皿のことをおてしょといいましたね。あれも、いまはいいませんね。沢村 いちいち通訳しなくちゃならない。「ちょっとおてしょ持ってきて」「えッ」「あのね、おてしょっていうのはね」と。不便ですね。
- (20) 実父の方は、アメリカでおまえは肉体労働で稼いできたのか？ そうか、よろしい。肴はいらないな。「この娘にはお手塩（小皿のこと）に塩を持ってきておやり」と、台所へ向かって叫びふざけてみせた。

「こおりすい」「すい」が廃れ「かき氷」になり（戸板（1962））、「二六時中→四六時中」「地久節→皇后誕生日」「西洋料理→洋食」「万国公法→国際（公）法」「バッテリー→ポート」「ギヤマン→ガラス」「ハンケチ→ハンカチ」「活動（写真）→映画」などの変化が起こった。

- (21) 「万国公法」という言葉は今日は使われませんが、私どもの学生の時分にはまだこの言葉が一般に行われておりました。（高橋（2009））
- (22) 新村出博士ぐらいの世代では、バッテリー、ギヤマンという語にもなじみがあったらしいが、六十代以下になると、ポート、ガラスが普通である。五六十代ぐらいの者は、まだ「活動（写真）」と言うことがあるし、「ハンケチ」と言う。しかし、中年以下は、「映画」「ハンカチ」である。（岩淵（1965））高橋は経済学者の高橋誠一郎（1884～1982）、新村は言語学者の新村出（1876～

1967) のことである。岩淵は国語学者の岩淵悦太郎 (1905~1978)。

外来語を用いる動機に「気取る」というものがあり、安藤 (1971) の「ものごころ ついた時、わたしのうちは玉突き^{たまつき}をしていた。気取っていうと、ピリアードである」が参考になる。

「貧民窟」「細民」「でっち」「異人」などは、差別的であるとの語感が生じて、「スラム」「貧しい人」「店員」「外国人」などに言い換える必要が出た。そのことばを差別的であるとも意識せずに使っていた世代は「今は「使えない／使わない」という感覚を持ちやすい。

(23) 私の大学の卒業論文は細民の出産率に関係する研究であった——この“細民”というのは、貧民などと共に今日では使用されなくなっている。(磯村 (1985))

(24) (「でっち」について) ちょっと差別用語のような所があって今は使われませんが、商家で働く年齢も地位も低い使用人のこと。使用人の最高の「番頭」と対の形で少し前までよく聞かれた単語である。(渡辺 (1997))

以前の言い方が差別的であるから別のものに変えるというのが上記の場合であるが、前のことばに何かしらのよさがあることを記録に残す人もいる。昭和天皇の侍従長を務めた入江相政 (1905~1985) の「夜汽車」についての指摘は、本稿の筆者にも何となく共感できるところがある (入江 (1985))。

(25) 私がはじめて京都へ行ったのは、中学三年、大正のおわりごろのこと。春休みに、夜汽車 (このごろは夜行列車か、それも昔のように人は乗らなくなった。乗る必要もなくなったからか。でも「夜^よ汽^き車^{しゃ}」という明治生まれのこの言葉、その構成には、融通無碍のいい味がある) で行った。

一方、新しい言い方に新鮮さなどが感じられて受け入れられる場合がある (寿岳 (1977))。

(26) 昨今、「しんどい」は標準語入りとまではゆかなくとも、共通語のはしくれになった感がある。「それはちょっとしんどいね」というような使われ方は東京でも見られよう。ちょっとした新鮮味に支えられて、一種知的な操作をされての東下りである。

「東京都となったとき、市バスはトバスとなった。トバスとは何となく変である」(大野 (1960)) のごとく、新しい言い方に違和感が表明されることもある。トバスに既存語の「飛ばす」の影がちらついて変に感じたのであろうか。

一般的には類義語間の交代が進んでも、固有名に以前の言い方がかろうじて残る場合がある。飲食店などが並ぶ通りを「~新道」「~横丁 (横町)」などということがあるが (ここでの「新道」は「しんみち」)、「横丁」のほうは「渋谷横丁」(東京都の渋谷、2020年にできた)のように新たな場所の名づけに用いられることがあるが、「新道」

のほうは東京都北区の「さくら新道」など、ごくわずかしかなく、新たに造語に用いられる気配もない⁽¹⁸⁾。戸板(1958)の指摘を記す。

- (27) 盛り場や停車場付近には飲食店が軒を並べた横丁がある。昔は、それに新道(しんみち)とか店(たな)とかいう名前がついていた。今は××横丁、あるいは○○小路というが多い。

語の交代に伴い、古いほうの言い方は特殊な意味でのみ残るという場合がある。「色眼鏡・サングラス」のペアがそうであるが、まず物そのものについての評価を見ておく。作家の山口瞳(1926~1995)は1980年3月13日号の『週刊新潮』に次のように記している。

- (28) 色つきの眼鏡に対する考え方もずいぶん変わってきたもので、昭和二十五年一月十九日にアメリカから帰国した田中絹代は、羽田空港でタラップをおりるときにサングラスをかけていたというので、こっぴどく擲揄やゆされたものである。あれは気の毒な事件だった。それくらいに、眼鏡に対する偏見があった。

「色眼鏡」については、フランス文学者の多田道太郎(1924~2007)が1977年10月号・11月号の中に「サン・グラス(と色眼鏡のことを近ごろは言う)をかけたりする」と語の交代がうかがえる書き方をしていた。このような交代の結果、「色眼鏡」は「先入観に支配された見方」という比喩的な意味でのみ使われる語となった。

類義語に関連し、永倉(1990)の「昭和20年代後半から30年代前半にかけての「青春の食品」の代表格がコッペパンであったが、昭和35年ごろを境に、その座をインスタントラーメンに奪われた」という指摘が意味するところを考慮しておく必要がある。「コッペパン」と「インスタントラーメン」は、どちらも食品ではあるが、一般的な意味での類義関係にはない。しかし戦後の「青春の食品」という条件のもとでは、密接に関連した二つの語としての扱いが必要になる。「万年筆」に対する「ワープロ」「パソコン」というのも、普通は類義語研究の対象にはならないが、文章を書くための道具としては、それぞれの通時的・共時的な比較が要る。

3.2.3 粘りと回帰

ある時期に「Xということばは「廃れた／死語になった」と評されたとしても、その語が粘り強く使われる、または、廃れた状態から持ち直すという場合がある。たとえば「チャック(商標名)」は「戦前まで「チャック」と呼んでいた品を、敗戦後のアメリカとの接近を境に「ファスナー」と呼ぶようになったが、このことが示すとおり、接近が急激なときほど古い借用語は容易にすてられていくものである」(亀井ほか(2007b))というように、死語化したように捉えられたが(同書の単行本は1965年の刊行)、現在でも「ファスナー」「ジッパー」と競合状態にあり、「すてられ」

たとまでは言えない。「口にチャックする」のような言い方があるのは、ほかの2語よりも日常に定着したあかしであるとも見られる。

「そば（蕎麦）」は、「中華そば」という言い方が行われた時期には、単に「そば」と言えば「中華そば」のことと捉えられ、わざわざ「日本そば」の語形を用いる必要に迫られたが（安藤（1965）、岩淵（1965）、加太（1988））、その後「ラーメン」が定着し、「日本」をつけずとも古来の「そば」の意で通じるように回帰した。なお「中華そば」と並んで「支那そば」という言い方もあったが、「執筆者が支那そばと書いたのに、編集者が中華そばと書き改める新聞社がある。支那は中国を馬鹿にした言葉だという。我々は何十年もこれを用いて、馬鹿にした語だとは知らなかった。今も知らない」（山本（1976））といった事情により、「中華そば」よりも使いにくい語となる。飯豊（1981）は自身の少年時代は「支那そば」と言ったが、今なら「ラーメン」と呼ぶのであろうと記している（「支那麺」（東京都渋谷区にある店の看板、2020年12月16日）のように現在でも時折「支那」を見かけることがある）。

1970年代には、あいさつが消えたという話題が盛んになる。山口瞳は1970年4月18日号の『週刊新潮』に「最近、帝国ホテルの宴会場でも、ひどい目に遇った。彼等は、がいしていえば、常に無言である。ごめんなさい、すみません、という言葉も出てこない。チップを渡したときだけ、有難うと言う」と指摘し、土屋（1975）には「あいさつが少しずつ消えていく時代らしい。あいさつを全然しない、あるいは語彙が貧しい、という批判が各方面から出た」とある（1970年代（特に前半）にこのような指摘が多い）。世の中では、1960年代から1970年代に公害問題が顕著になり、連合赤軍によるあさま山荘事件（1972）、第1次オイルショック（1973）、三菱重工爆破事件（1974）などが起こっている。世相とことばとの関連については、今後、検討する必要があるが、ひとまず現在は「常に無言」「あいさつを全然しない」状態は脱したように感じる⁽¹⁹⁾。

3.2.4 語の定着

あることばが「昔／その頃」はなかった」「今の人にとっては当たり前のようでも」といった形で振り返られることがある。たとえば作家の芥川龍之介（1892～1927）は「本所両国」（1928）に「鉄条網といふ言葉は今日では誰も知らない者はない。けれども日露役の起つた時には全然在来の辞書にない、新しい言葉の一つだつたのである」と記している。漫画家・田河水泡（1899～1989）の妻・高見沢潤子は、1929年に雑誌『富士』に載った「人造漫画」という連載漫画について述べる際に、「機械文化が盛んになったいまでこそ、人造人間（ロボット）も流行し、漫画にもよく描かれるようになったが、当時は「人造人間」という言葉さえ珍しいほどだった」と記している（田河・高見沢（2010））。どちらもことばとして新しかったというように記憶してい

るが、さらに当時としては、まだそのことばが存在していなかったという形で記録されることもある。「五十五年体制」に例をとる。この語は「自由民主党と日本社会党の二大政党による日本政治の仕組み。一九五五年（昭和三〇）に、分裂していた日本社会党の統一と、自由民主党の結成により成立した」（『大辞林 第4版』）と定義される。「五十五年体制」について政治学者の五百旗頭真（1943～）は、政治家の宮沢喜一（1919～2007）にインタビューした際のエピソードを次のように記している（五百旗頭（2013）。同書の単行本は2001年の刊行）。

- (29) 私は最後の質問として、「五十五年体制の成立をどのようにみておられたか」とたずねた。宮沢は忘れごとなどしたことのない優等生が突然とがめられた際のように、すまなそうに「それが、何の記憶もないんです」と答えた。しかし、記憶がないという記憶は実は正確であろう。なぜなら一九五五年当時は、「五十五年体制」という概念はなく、六〇年代になって、升味準之輔がこの言葉を用いたのちに一般化したものだからである。当時の激動の中では、「体制」と称しうるほどに持続的なものである保証はなかったのである⁽²⁰⁾。

ことばよりも、物事そのものがなかった（珍しかった）ことに注意が払われる場合もある。芥川龍之介が死んだ当時（1927年）を振り返り、その妻である芥川文（1900～1968）は『追想 芥川龍之介』で「主人は七月二十四日に亡くなりました。暑い日であり、死後三日間もお通夜をしましたので、当時はドライアイスなどなかった時代でしたから、ずいぶん気を使いました」と述べている⁽²¹⁾。ことばを語るにせよ、物事を語るにせよ、現在の有の状態をもとに、無の時代を振り返る思考方法であり、現在の無（衰退）の状況をもとに過去の有の状況を振り返るのとは反対の関係にある。もっとも、指摘の数としては後者のほうが圧倒的に多い。前者は「今はXがあるから便利だが、昔はなかった（ゆえに苦勞した）」というように振り返られるのが一つのパターンであるが、そこには「便利である」といった現状を肯定する気持ちがあり、過去の不便な状態は文章に書き残すまでもないと判断される場合が多いようである。一方、後者の場合、大切な物事やことばが失われたと気づくのが出発点となり、現状が過去に比べてよい状態にあるとも思えない、過去の日本（語）には、このようなよい面があったということを記録しておきたい、というような気持ちを人々がいただく結果、数多くの指摘が書き残されることとなる。

3.2.5 物事の一般化により廃れたことば

女性が勤めに出ることが珍しい時代には「職業婦人」という語が用いられた。しかし、やがてそれが珍しいことではなくなり、「職業婦人」という語は使われなくなった（池田（1981））。海外に旅行や留学をすることが一般化し、「洋行」が用いられな

くなった例もある。翻訳家の清水俊二（1906～1988）は1931年当時について、その頃はニューヨークに行くのが大変なことであり、船と汽車を使って4週間近くかかる述べたあとに「外国に行くことを“洋行”といい、“洋行帰り”が肩書の一つに数えられていた時代だった」と述べている（清水（1988））。海外に行くのが当たり前になってからは、それが特別だった時代の語感を帯びる「洋行」は使われず、「海外旅行」「海外留学」というように、用途に応じた分析的な表現が用いられるようになる。「公開能」は、『日本国語大辞典 第2版』などにも載っていない語であるが、一時期、使われた時代があったようである。ドイツ文学者の高橋義孝（1913～1995）は、1939年に東京の日比谷を歩いていたところ、東宝劇場で梅若流の公開能が行われているのを見かけた（高橋（2001））。そして、その「公開能」について「今日では公開能というのは変な言葉だと思われるかも知れないが、当時は、能は限られた愛好者だけが見るもので、一般の人々は手軽に見に行けなかった」との記録を残している。今なら単に「（お）能」というところである。

4. 事例研究

4.1 戦争の記憶、戦前戦中のことば・世相

近現代に起こったできごとのうち、第二次世界大戦は、非常に大きなものであった。戦前・戦中の準封建主義の社会と戦後の民主主義の社会とでは、風俗や人の心に大きな違いが生じる⁽²²⁾。そういった違いを表す物事をまとめて以下に見ていく。ここでは物事が廃れた場合も、ことばそのものが廃れた場合もともに扱う。

朝日新聞の入江徳郎は1964年にコラム「天声人語」に「赤紙、といっても若い人にはとっさにわからないかもしれないが、召集令状のことである。中年の人ならば、赤紙といえば、戦争と人間の運命を思いうかべるだろう」と記している（入江（1981））。「中年の人ならば」以下が学校の勉強またはテレビ・映画で得た知識の範囲では得られない感覚である。「赤紙」は現在の生活には存在しない。「銃後」「大本営」「修身」「奉安殿」「紀元節」「玉音」「玉砕」「英霊」「クリーク」「トーチカ」「オフリミット」などの例もある。「オンリー」は「第二次大戦後の占領下、一人の特定の外国人だけと交渉をもった売春婦の称」（『大辞林 第4版』）の意味を持つ。村島（1965）によれば「「パンパン」のなかで、「オンリー」になるものがふえてきた。いつまでも、「不特定多数」が相手では、やるせなくなったのだろう」とのことであったが、結城（1986）の頃になると「敗戦直後の世相を書くにしても、若い人たちにはGHQもGIも死語に近い。オンリーとか^{まちあい}待合などもわからないだろう」というように記され、文章内に用いるにしても、注記が必要であることばと化していることがうかがえる。「桜」は昔も今も使われる語であるが、『明解物語』の中で『新明解国語辞典』の編者であった倉持保男（1934～2018）が「散り際のよさということから、武士道と結びつけられ

たとか、例の「貴様と俺とは同期の桜」とか、そういう戦争中の一つのシンボルとしても使われた」と指摘するように、軍国主義と結び付けられた歴史があるが、戦後世代にとっては縁遠い話となる⁽²³⁾。

「忠義」「忠君」「忠君愛国」「忠孝」など天皇への忠誠に関することばは、戦後世代にとっては必要性が感じられなくなる。大野(2002)の記述からは、かつての「忠孝」についての感覚がうかがえる(すべての人が同じ感覚を持っていたわけではない)。

- (30) 私が少年のころ、われわれを動かしていたいくつかの条件があります。時代は天皇制の時代です。天皇に対する忠、親に対する孝。忠と孝が社会を動かす基本的な倫理として、厳然とありました。戦後、その天皇制は否定され、チュウコウといっても、今の学生たちは何のことか分らず、ネズミのことではないかと思ったりするでしょう。しかし、われわれの時代には忠と孝というのは行動と価値判断の規準でした^{(24) (25)}。

「忠孝」が身近にあることばないし概念であったことは(それをよしとしない立場もある)、「捨てかねた暮らしの、いくつかの名残がある。まず、菊水に「忠孝」を浮き彫りにした重い鉄製の灰皿」という記述からもうかがえる(児玉(2000))。文中の「菊水」は楠氏の家紋である⁽²⁶⁾。

「忍耐」ということばについて、ジャーナリストの笠信太郎(1900~1967)は1956年1月1日付の朝日新聞に「すっかり汚れを身につけて、気の毒な言葉が少なくない。忍耐とか修身とかいう徳目に関する言葉が、その汚れをふるい落とすには、まだ少し時間がかかりそうである」と述べていた⁽²⁷⁾。「修身」はともかく、「忍耐」の「汚れ」は薄くなり、必要に応じて使うことばとなっている(「忍耐力」など)⁽²⁸⁾。「国」「国家」も同様に、そのことばが使いにくかったという戦後まもなくの頃と比べれば、戦前・戦中を意識せずに使われるようになっていく(「国」に対し「国家」は「国家公務員」など合成語の要素として使うことが多いというような違いはある)。かつての感覚がうかがえる「国」「国家」の例を挙げる⁽²⁹⁾。

- (31) いまどき、国を思うだの、親孝行だのと口にすれば、それだけで戦後生まれの諸君の失笑を買うことは必定であろう。(阿部(1980))

- (32) 戦後、愛国心または祖国愛の喪失ということがいわれている。八月十五日を境として、日本人に一種の精神的空白が生まれたことは自他ともに認めるところである。それは敗戦によってもたらされた、あまりにも強烈であった戦時中の国家主義や日本主義にたいする反動であった。人々は人間としてきわめて自然な感情である愛国心さえ失ってしまい、国家という言葉さえ好まず、これを使うのを避けるようになった。(蛭山(2006)) ※同書の単行本は1966年に中央公論社から刊行された。

「人民」「市民」といった言い方が根づいていないこともあり、「国民」も、現在で

は一般的に使われる（「主権者」が用いられることもある）。

4.2 年末年始

かつての日本では、「満年齢」ではなく「数え年」による年齢の数え方が行われていた。それが満年齢に変わるの、1950年の「年齢のとなえ方に関する法律」以降のことである。この変更に伴うことばへの影響を考えていく。以下、その数え方が行われている期間のことを「数え年時代」「満年齢時代」と呼ぶ。数え年時代においては、正月には「新しい年」という意味に加えて、「日本人みなが一つ年を重ねるとき」という意味を持っていた。満年齢時代よりも、正月に重みがあった。白井（1997）は数え年時代には「個人の誕生日はそれほど意識にはのぼらない。そこで年齢が加わる一里塚ではないからだ」と述べた。かつての正月について、井上（1980）は次のように記している。

- (33) 戦前は元日をむかえると、誰しものがひとしなみに、一つずつトシをとったものであった。共通の体験は、人びとのあいだに共通の意識をうみやすい。みんな同じく一つずつトシをとることで、戦前の人びとは正月の気分を共有することができたのである。正月の民俗行事の多くは、この正月気分の共有性によって支えられていたといつてよい。

このような特別な正月を迎えるには、12月の間に準備を整える必要がある。たとえば、高橋（1975）によれば、かつては、大みそかに髪を切りに行くのが一般的であったという。

- (34) 床屋さんにきくと、近年は大晦日だからといって、昔のように夜ッびで客が来ててんてこ舞いをするということもないそうだ。（中略）私は永年の習慣で、行きつけの床屋さんへは大晦日に少し包むことにしているが、近頃ではそんなことをするのにも気が引けるようになってきた。

年末年始についての心の持ちようについて、国文学者の池田弥三郎（1914～1982）が1975年12月27日の毎日新聞（夕刊）に次のように記している。

- (35) 「おしつまりました」という、年末の懐かしい挨拶も、近頃はほとんど聞かなくなりました。十二月は、一年のどんづまりという感じでなく、十二カ月の終わりの一カ月にすぎず、それはまた、ただごくあたりまえに、十二カ月の始めの一カ月の、一月に移っていくだけのことになったらしい。

年末の決まり文句として新聞やテレビに「押しつまる」「押し迫る」が使われることは今でもある。しかし、数え年時代においては、みなが正月に一齐に年を重ねるだけあって、その分、年末が特別なものに感じられた。満年齢時代の人間が自身の誕生日（の直前の期間）に対していただく感情が、数え年時代においては、すべて年末年始に集中していたと考えればわかりやすいかもしれない。

新年の「初湯」は「あんまりつかわなくなったが、いかにも、さわやかで好きなことばだ」(安藤(1968))とされ、また「初茜」「初空」「初雀」および「おさがり」などは「初茜とか初空とか、あるいは元日に降る雨や雪を御降りと云ったりする気持が、年を重ねるとだんだん分ってくる。昨日おととい飛んで来た姿は少しも変りはないのに、初雀と呼んだりする」(永井(1991))と記録された。「おさがり」は「降れば豊年のしるしとされ、めでたいものとされた」(『日本国語大辞典 第2版』)という意味である。俳句の季語としてはともかく、ふだんの生活でこれらの「初～」を見かける機会は乏しい。

年始には「御慶」「年始回り」(江藤(1976))、「回礼」(井之口ほか(1980))といった習慣があったが、戦後は「年賀状」がそれに代わり、現在は「年賀状」が電子メールやLINE(ライン社が提供する、インスタント-メッセージャーのサービス(『大辞林 第4版』))に取って代わられつつある。

以上に見たような年末年始のあり方は現在のそれとは異なる。満年齢時代の日本人は、他者との共通体験、共通意識を持ちにくくなり、孤独になった面もあるのではないか。

5. おわりに

高齢化社会とは、多くの高齢者が長い間の人生経験を後進の世代に対して、よりたくさん、より長いときをかけて伝えることのできる社会であると考えてみる。そこでは、高齢の世代にも、後進の世代にも、相手は自分とは異なる状況に、異なる年齢で置かれていると理解し、相手の気持ちを想像する力が要るが、寿命が長くなった分、その理解力・想像力を及ぼすべき範囲は広い。このような社会に合理主義者は適さない。宇野(2016)はイギリスの哲学者・マイケル・オークショット(1901~1990)が批判する合理主義者を次のように定義する。

- (36) 理性のみを強調し、権威や伝統、慣習といったものからの精神の独立を主張する人々である。そのような合理主義者は経験を否定するわけではないが、認めるのはあくまで自分自身だけの経験である。言い換えれば、合理主義者は人の経験から学ぼうとしない。

このような合理主義者にとっては、ほかの世代との断絶は気にならないであろう。あるいは、自身の立場やことばを正統化することのみに腐心するかもしれない。

筆者は、本稿で断絶の諸パターンを提示した。中には、やむをえない断絶もあれば、食い止める努力をしてもよい断絶もあることであろう。「粘りと回帰」のところで見えた「あいさつ」のように復活したと見たくなる現象もある。21世紀を生きる日本人(日本語を母語とする人)には、上の世代が守り、子や孫に伝えてきた日本語のうち、何を継承し、何を健全に発展させるべきなのか、じっくり考える時間が用意されている

⁽³⁰⁾。それも高齢化社会の一側面である。

注

- (1) 犬や猫を飼っている人はノミに出くわす可能性が高いから、ノミについての感覚は生活環境によっても異なる。もっとも、戦中戦後の時期を生きた柳田氏にとってのノミと、ペットに寄生する虫として理解する人にとってのノミとは、それぞれのノミに対する実感の中身は違う。
- (2) 経営学者・ピーター・ドラッカー（1909～2005）の『断絶の時代』（1969）を機に、日本で「断絶」という語が流行した。児玉（2000）に「彼自身が父親の年齢になってみて、親子論を考えることがある。「親子の断絶などとさかんにいわれていますが、断絶なんかじゃない。親が子に遠慮をしているのです。最大の原因は、敗戦というコンプレックスによるんじゃないかな」あの時代の父は、子に対してもっと強く、父としての自信にあふれていた。だがいまは子供に何かをいえば二ことめにはいい返されてしまう。「なんだい。父さんたち戦争に負けたじゃないか」それを無意識のうちに怖がっている」との指摘がある。戦前派・戦中派と戦後派の溝の深さをうかがわせる。「父親の権威」といった言葉も、死語になって久しい（もはやパロディにすらならない）」（宇野（2016））と評されるのも、このあたりに根がありそうである。
- (3) 作曲家の山田耕作（1886～1965）の自伝『山田耕作 自伝 若き日の狂詩曲』に「近所の商人からもって来させたサイダァ」という用例がある。
- (4) 身分の上下を感じさせるから使役表現がふさわしくないという考え方から飛躍し、単純に使役表現はよくないというように考えてしまうと、教師→児童・生徒、親→子どものように、使役（教育・指導）すべき立場にある人間による使役表現も好ましくないといった行き過ぎが生じている。
- (5) 下町で使われた「いけすかない」は「高橋 ちかごろ使いませんね、いけ好かないって」となり（高橋ほか（1988））、「さくい（気さく）」は「ものわりのいい人を「さくい」と言ったが、今使う人はいるだろうか」との疑問をいだかれる（金田一（2002））。
- (6) 作家の鈴木りか（2003～）は『さよなら、田中さん』（2017）の中で、国語の教科書に出てきた「ひもじい」について担任教師が児童に対し「ひもじいというのは、空腹で食べ物が欲しい、ひどくお腹が減っているという意味です。戦時中は、欠食児童という言葉もありましたが、大人でも子供でも、ひもじい思いをした人がたくさんいました。食べ物があふれて、飽食の時代といわれる現代では、あまり使われなくなった言葉です」と説明する場面をえがいている。
- (7) 作家の小林信彦（1932～）は1986年8月15日の「京都新聞」に「人間、小説、映画を含めて、あらゆるものを〈明るい〉〈暗い〉で分けることが、数年前から一般的になった。〈明るい〉は肯定的、〈暗い〉は否定的意味合いをもつ」と述べている。昔と異なり、暗い小説や映画が支持されないことや「じっさいの性格は暗いとしても、表面的には明るく楽しく面白いタレントが大人に好まれる」ことなどを根拠とし、「平和が続き、いちおうは〈豊か〉であり、飽食の時代でもある」ことが原因であると指摘する（引用は1990年の新潮文庫版『時代観察者の冒険』による）。しかし、バブル経済が崩壊し、オウム真理教による地下鉄サリン事件などが起こった1990年代には、「暗い」現実から目を背けてはいられなくなり、「明るい・暗い」の対義関係が一応は復活した。「明るい」ことのみをよしとした時期を満喫した人たちの現在の気持ちについては、聞き取り調査の研究課題になりうる。昔はよかったとを感じるのか、今のほうがいいのかなど。「明るい・暗い」については柳田（2002）の「悲しみの復権」も参照。
- (8) 『東京弁辞典』は「ごきんとうさま」の語形で立項し、「お返しをされた時、現金をきちんとわたされた時など、挨拶にいう言葉。おかたいことで、ご丁寧に、などの意。「ごきんとさま」

- とも」とする。
- (9) 戦前の慣習は否定したい、戦前派・戦中派の言うことは聞きたくないという戦後派による心理的な理由が関与していた可能性もある。
- (10) 戦前・戦中の東京を生きた言語学者が戦後しばらくの状況を目の当たりにした際に、「感じのいい待遇表現のマニュアル」(狭い意味での敬語に限られない)を作成し、一般に広めるといふ努力をすべきではなかったか、という気もする。
- (11) 小島(1970)は「夕方の御飯前の家の雰囲気が子供心を誘うのだろうか。どんな面白い遊びも、突然魅力を失うのだ。そんな時 アバヨ、芝よ、金杉よ 統制を破って、自分一人が帰ると言い出すのがキマリが悪いのか、そんなことを口にして列を離れる」と記していた。「金杉」は『日本国語大辞典 第2版』に「東京都港区芝一・二丁目付近の旧称。江戸時代は漁村として知られた」とある。アクセントは平板型。
- (12) 東京の神田和泉町では火の用心の掛け声とともに拍子木の音を聞くことがある。ほかの場所にも同様のことがあるようである。地域のつながりを見直すといった理由から、夜回りの拍子木が復活したということであろうか。高橋が指摘した頃からの流れを調べる必要がある。東京本郷に生まれ育った山下好子氏(1939～)によると、本郷では冬に火の用心の拍子木の音を耳にするが、地域によっては、盆踊りと拍子木の音がうるさいと言う住民もいて、音が出しにくくなっているという事情もあるとのことである。現在の大学生の声を聞くと、夜回りの拍子木の音を聞いたことのある学生と、拍子木を知らない、その音を聞いたことがないという学生とに大きく分かれる。
- (13) 2020年9月27日付の日本経済新聞に「縁側」のよさが見直されているという趣旨の記事が載っている。そこで近所の人との会話が生まれるという例も挙がっていた。「上がりがまち」にも同様のことが起こらないとも限らない。
- (14) 東京の向島について『日本国語大辞典 第2版』には「江戸時代に天領となる。郊外の景趣に富み」とある。東京の都会と「いなか」が連続することを捉えるうえで幸田(1993)の記述が参考になる(1950年の執筆)。幸田は自身の子ども頃の向島について「どんどんと小工場地化し荒れてきていたが、それでも少しはいると田圃や畠がのんきにひろがっていた。細いうねうねの径、両側に生籬のしきるしもたや、末は大川へしほれる小流れ、水芹・嫁菜、ところどころに藪、夏はそこへからす瓜、零余子がからみつく。土間の広い百姓家、井戸端に柿、貧しげな牧場、梨の棚」と記している。また、早稲田についてはジャーナリストの市島謙吉(1860～1944)が早稲田大学の前身・東京専門学校に関し「開校の当時は、校門の前は満目水田で、境界の畑地はみな茗荷畑であった。この地の付近には種々の古蹟があって、芭蕉庵もあれば道灌の山吹の里もあり、堀部安兵衛の復讐の遺蹟もあり、ほととぎすを聞く風流地ともいわれた」と述べているのが参考になる(1941年の『回顧録』に記される。本稿では松本(2007)の記述による。同書の単行本は1963年の刊行)。
- (15) 山の多い非都会地域では「峠」に対しなじみがあるだろうが、そこを通る際は車を使う時代となったため、歩いて峠を越える感覚を人々は知り得なくなった。これは「[[流感もやっと峠を越しました]」といっても、形容として使うだけで、ことばに実感はない(戸板(1962))という指摘につながる。なお、筆者が歩いて峠を越えながら旅をしていると、どうして歩いているのか(なぜ車を使わないのか)と地元の人にいぶかしがられることがよくある。車依存の度合いが高いことを示す話として記す。
- (16) 江戸時代は日本の人口の8割が農民であったと聞く。大部分の人が都会暮らしをしていなかった。その子孫が現代人であり、その心の奥には、あの頃の生活(ルーツとしてのいなかも

のないし農民)には戻りたくないという恐れにも似た感覚があるのではないかと筆者は疑っている。それゆえ、人々は特に東京に出てきて、実入りのいい職業に就き、都会的な暮らしをしたいと考える(戦後の民主主義は、そのような個人にとって、非常に都合のいいシステムであった)。その結果、近世以来(またはそれ以前から)の各地の城下町、商都、農村などが衰退する。そのような歴史を知らない都会人は、東京から他県に出かけると「腐れている」ということばを平気で口にする。現代の都会人には都会と非都会の相互依存という発想が欠けているとも言える。もっとも近年は地域研究を志す若者など、これに当てはまらない都会人も生まれてきているので、上に記したことは、おおよその全体像を記したものとして理解されたい。

- (17) 1938年に評論家の長谷川如是閑(1875～1969)は、日本人は西洋の模倣をするが、肝心なことを模倣し忘れておるとし、「都会」と「森林」の関係を次のように述べる(飯田・山領(2011))。「文明の都会の心臓は何であるか。都会生活の不自然のために汚れた空気を生理的に、また精神的に浄める空間がそれだといわれる。その心臓の扱い方を日本人は全然知っていない。それは空間を自然化するということだが、西洋人は、それを必ず森林公園の形で都会に与えている。西洋の大都会は悉く森林公園をもっている。ロンドンのハイド・パーク、ベルリンのチーヤガルテン、パリのポア・ド・ブローニュ、その他どこにも森林が、都会の心臓として新鮮の空気を都会人の心臓と精神とに送る役割を勤めている。しかるに日本人は、それを忘れておる。幸い東京には中央に宮城の森林区域があつて、公開こそされないが、都会の心臓の役をしている。しかしそれも徳川時代に出来たので、今の日本人の意識とは没交渉の起原をもつたものである。それがために、都会人の遊樂は、銀座、新宿、というような、あらゆる意味の毒素の漂うている空気の中に求められる。しかもその繁栄区域の内容は、何ら日本人的の文化形態の發展ではなく、全く西洋の都会の場末の悪趣味、いわゆる植民地的享樂地帯の移植である。これほど日本の国を未開國的に表現している現象はない。それというのも、日本人が「自然」を全體的に鑑賞する意識に欠けていることに責任があるといわねばならぬ。盆栽趣味や盆景趣味では、大衆的に、國民的に、自然を楽しむ心理にも感情にも發展され得ない。都市の經營という場合にも、局部的に盆景的の公園を作ることを知つていても、大自然の規模を髣髴せしめる森林公園を都会に作ることを知らない」。長めに引用したのは、ここで指摘されていることの多くが現在の日本にも当てはまり、現代人が耳を傾けるべき事柄であると考えたからである。参考までに記すと、ハイドパークの面積が146ヘクタールであるのに対し、日比谷公園の面積は約16ヘクタールである。
- (18) 「～横丁」は健在でも、単独で「大通りから横丁に入る」というような使い方をするかという疑問がある。林(1991)は「横丁」は「路地」と言ったほうが、いまではわかりやすいだろう。東京大空襲は、東京のいたるところにあつた横丁をも全滅させてしまった。私が空襲で焼けるまで住んだ浅草町の家も、横丁づたいに玄関があつた」と書き残している。
- (19) 1970年代の日本人の心理について、たとえば服部(2015)には政治家の中曾根康弘(1918～2019)による「日本人は戦後四半世紀、いな、むしろ明治以後百年、常に「坂の上の一朶の雲」を見つめて、わき目もふらず走り上つてきた。今、一つの頂きに到達し、日本人は前途への展望よりも、ある種の落胆、空しさ、不安を感じている。ここ数年来の公害問題、物価問題が、これまでに得たもの大きさを忘れさせ、失つたものへの悔恨をかきたてている」との発言が紹介されているのが参考になる。さまざまな立場の人が当時述べたこと、または、当時を振り返って述べたことを記録した文献などを収集する必要がある。
- (20) 現象としては後年のそれと近いものの、ことばはまだない、という回想の例として前述の山田耕作の自伝に「その頃は、ちょうど日清戦争が終つて、日本はまさに不景気の絶頂にあつ

た頃だ。緊縮という言葉こそなかったが、あらゆる方面の節約が行われた時代だ」という指摘が挙げられる。財政に関して「緊縮」を使うのが一般化するのには、『日本国語大辞典 第2版』によれば「昭和四年（一九二九）七月に誕生した浜口雄幸内閣の掲げた緊縮政策によるといわれる」とのことである。

- (21) ある物事があるにはあるが、まだ一般化していなかったということもある。「喫茶店」について植草（2005）が「いまだき信じられそうもないが、昭和三年ごろの東京には喫茶店が全部で二百軒くらいしかなかった。これはぼくが昭和五年ごろまで喫茶店めぐりをやった結果の数字であって、ほぼ正確だといえるのは当時「あいつは喫茶店ゴロだよ」という相手を軽べつした学生ことばがあって、ぼくはその一人だったからである」と記しているような場合である。「喫茶店ゴロ」の「ごろ」は「ごろつき」の略。
- (22) 徳川（1962）では「今日ですら、日本は封建的であるといわれている」と述べられている。
- (23) ことばが縁遠くなれば語形（や意味など）への影響も生じうる。戸板（1958）は「男の子が学帽のひさしを前にして「王様」後にして「水雷」横に出して「駆逐」という軍艦遊戯は、今でも残っているが、家の弟の子供は「クチク」を「カチク」と誤って発音している。軍艦の知識から遠ざかっている証拠である」と述べていた。
- (24) 橋川（2007）に大野よりも上の世代の状況がうかがえる記述がある（同書の単行本は1962年の刊行）。「1908年文部省は、教科用図書調査委員会をつくり、従来ともすれば軽視されていた家の理念にもとづき、国民道徳を再構成する作業に着手した。委員長には保守主義者穂積八束（1860～1912）が任命された。こうして改訂された国定教科書は、あたかも就学児童の数の増大と相まって、はじめて全国画一的に普及した教科書であった。修身教科書ではそれ以前にはなかった「チュウギ」の科目が一、二年の教材に現われたばかりでなく、従来は「愛国」「忠君」として別々にかかげられていた徳目がはじめて結びつけられて「忠君愛国」の表題で現われてきた。このように忠義という個人的道徳が、愛国という集团的徳目に媒介されるために、新たにその統一原理として強調されるようになったのが家族主義の理念であり、また祖先信仰の原理であった。第一期教科書に見られた「他人の自由」「社会の進歩」「競争」「信用」「金銭」などというブルジョア的倫理は後退し、それに代わって「皇大神宮」「建国」「国体の精華」「忠孝一致」「皇祖皇宗の御遺訓」等の家族国家理念が前面におし出されるようになった」。明治・大正の全期間にわたって忠君愛国が徹底されたわけではなかった。
- (25) 上記のような感覚を持たない（戦後の）世代にとっては「忠孝」はなじみのない語となり、あえてその語を発しようとする、それは頭高型ではなく、平板型に発音されるというアクセントの動揺へとつながってくる。
- (26) 俳優の小沢昭一（1929～2012）は小沢（1978）に「「義理人情」は「忠義孝行」のお好きな方々が、「忠義孝行」が流行らなくなったので、代わりに使っているフシがある」と記していた。
- (27) 日清戦争の三国干渉のあと、「忍耐」と似た意味の四字熟語「臥薪嘗胆」^{がしんしやたん}が盛んに使われた（生方（1978）※使用したのは文庫版。単行本は1926年の刊行）。作家の小島政二郎（1894～1994）は小島（1966）に「誰も彼もみんな質素勤勉だった。それでも尚富国強兵でなかったために、遼東還付の悲しみを舐めなければならなかった。「臥薪嘗胆」という言葉を、明治の人達はどんな思いで肝に銘じたことか。今度の戦争で負けたら、負けたっばなしではないか。日本国の将来を思えば、レジャーなどと言って家を外に浮かれている時ではあるまい」と記していた。「今度の戦争」は第二次世界大戦のことである。1960代の初期に「レジャー」はやはりだし、たとえば1961年5月10日の「東京新聞夕刊」には「レジャーという言葉一色で、万事

- が塗りつぶされてしまい、一億総あそびといったような感じを与えるのは、全く言葉使いの荒っぽさが生み出す罪ではあるまいか」と記され、また同年の『週刊朝日』66-35には「飯沢 レジャーブームということばね、不快だな。浦松 レジャーなんて、われわれにありゃしないですよ。ないのにかかわらず、あるがごとくに錯覚させる。それは大企業が売りたいための宣伝ですよ」というように、この流行語に対する識者の不快感が表明されている（飯沢ほか（1961））。小島も同様に、しかし別の言い方で「レジャー」に対する不快感をあらわにしたと見ることができる。
- (28) 池田勇人内閣（1960）においては「寛容と忍耐」をモットーとした。
- (29) 徳川夢声（1894～1971）は14歳で府中一中（現在の日比谷高校）を受験したときのことを振り返り「口頭試験の時、将来の志望は、と問われて私は、ちゅうちょなく「政治家」と答えた。「政治家というと……政治家にもいろいろあるわけだが、どういう……?」「その、総理大臣であります……総理大臣になって、大いに国家のために尽します」てなことを、アッサリといった。今の少年は、もっと現実的になってから、こういう馬鹿なことは、いわないかも知れんが、その頃の少年は、皆、私とポチポチの考えを持っていたようである。「軍人であります。陸軍大将になって、乃木將軍のように、国家に尽したいと思ってます」「僕は、東郷大将のように、偉い軍人になって、国家に尽したいんです」「実業家です。三井や、岩崎のように偉い金持になって、国家に尽します」と、どれもこれも、皆エラくなって、皆国家の為に尽すつもりだ。なにしろ日清戦争の最中に生れて、日露戦争がすんで間もなくという時に、受験した少年だから、無理からぬ次第であろう」と述べている（徳川（1962））。「ポチポチ」は「似たり寄ったり」というような意味で使われているようである。
- (30) 外国人学習者に対して、自信を持って伝えることのできる日本語を模索する努力も要る。

参考文献

- 秋永一枝（2004）『東京弁辞典』東京堂出版
- 芥川文（述）、中野妙子（記）（1975）『追想 芥川龍之介』筑摩書房
- 芥川龍之介（1928）「本所両国」『大東京繁昌記 下町篇』春秋社
- 阿部昭（1980）『言葉ありき』河出書房新社
- 安藤鶴夫（1965）「上手な会話」『暮しの手帖』82
- 安藤鶴夫（1968）『わたしの東京』求龍堂
- 安藤鶴夫（1971）『安藤鶴夫作品集Ⅵ』朝日新聞社
- 飯沢匡、浦松佐美太郎、臼井吉見（1961）「不快指数と実力者」『週刊朝日』66-35
- 飯田泰三、山領健二（編）（2011）『長谷川如是閑評論集 第5刷』岩波書店
- 飯豊毅一（1981）「現代敬語の問題点」『自警』63-2
- 五百旗頭真（2013）『日本の近代6 戦争・占領・講和』中央公論新社
- 池田弥三郎（1977）「あばよ」『月刊言語』6-9
- 池田弥三郎（1981）「日本人の言語生活」『変わる日本語』講談社
- 石綿敏雄、見坊豪紀、前田愛、飛田良文（1979）「ことばの生まれるとき」『言語生活』335
- 磯村英一（1985）『私の昭和史』中央法規出版
- 市原豊太（1962）「女の言葉づかひと新カナ」『放送文化』17-5
- 稲垣吉彦（1983）『ことばの輪』文芸春秋
- 井上忠司（1980）「正月風俗の変遷」『言語生活』337

- 井之口章次, 小堀宗慶, 徳川宗賢, 宮尾登美子, 真田信治 (1980) 「正月のことばと習俗」『言語生活』337
- 入江相政 (1985) 『侍従長のひとりごと』講談社
- 入江徳郎 (1981) 『天声人語 5』朝日新聞社
- 岩淵悦太郎 (1965) 「現代語研究の問題」『国語学』60
- 植草甚一 (2005) 『植草甚一自伝』晶文社
- 宇野重規 (2016) 『保守主義とは何か』中央公論新社
- 生方敏郎 (1978) 『明治大正見聞史』中央公論社
- 江藤淳 (1976) 『続々こもんせんす』北洋社
- 江戸川乱歩 (2006) 『江戸川乱歩全集 28 探偵小説 40 年 (上)』光文社
- 大野晋 (1960) 「日本語の造語力」『国語改革論争』くろしお出版
- 大野晋 (2002) 『日本語の教室』岩波書店
- 小沢昭一 (1978) 『わた史発掘』文芸春秋
- 加太こうじ (1988) 『東京のなかの江戸』立風書房
- 亀井孝, 大藤時彦, 山田俊雄 (編) (2007a) 『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』平凡社
- 亀井孝, 大藤時彦, 山田俊雄 (編) (2007b) 『日本語の歴史 6 新しい国語への歩み』平凡社
- 金田一春彦 (1962) 「語感の正体」『言語生活』134
- 金田一春彦 (2002) 『日本語を反省してみませんか』角川書店
- 幸田文 (1993) 『ちぎれ雲』講談社
- 小島政二郎 (1966) 『木曜座談』鶴書房
- 小島政二郎 (1970) 『花ざかり』ロングランプレス
- 児玉清 (2008) 『負けるのは美しく』集英社
- 児玉隆也 (2000) 『一銭五厘たちの横丁』岩波書店
- 小林信彦 (1990) 『時代観察者の冒険』新潮社
- 斎藤次郎 (1984) 「子どものことばと意識」『言語生活』389
- 沢村貞子 (1990) 「「恥」について」『文芸春秋』68-2
- 柴田元幸 (2018) 『柴田元幸ベスト・エッセイ』筑摩書房
- 清水幾太郎 (2012) 『清水幾太郎「私の心の遍歴」』日本図書センター
- 清水俊二 (1988) 『映画字幕の作り方教えます』文芸春秋
- 寿岳章子 (1977) 「標準語の問題」『岩波講座日本語 3 国語国字問題』岩波書店
- 寿岳章子 (1995) 「女性語の 50 年」『日本語学』14-9
- 白井健策 (1997) 『天声人語 13』朝日新聞社
- 白藤礼幸 (1993) 「辞書のことば考」『国文学解釈と教材の研究』38-12
- 高橋誠一郎 (2009) 『新編 随筆慶応義塾』慶応義塾大学出版会
- 高橋義孝 (1975) 『新つれづれ草』角川書店
- 高橋義孝 (1981) 『すこし枯れた話』講談社
- 高橋義孝 (2001) 『私の人生頑固作法』講談社
- 高橋義孝, 柳家小さん, 沢村貞子 (1988) 「ほどのいいはなし 東京言葉今昔」『東京人』3-5
- 田河水泡, 高見沢潤子 (2010) 『田河水泡 のらくろ一代記』日本図書センター
- 玉川一郎 (1977) 『大正・本郷の子』青蛙房
- 土屋信一 (1975) 「話しことば」『国語年鑑昭和 50 年版』秀英出版

- 戸板康二 (1958) 『街の背番号』 青蛙房
戸板康二 (1962) 『ハンカチの鼠』 三月書房
徳川夢声 (1962) 『夢声自伝・明治篇 明治は遠くなりけり』 早川書房
永井荷風 (1986) 『荷風随筆集(上)』 岩波書店
永井龍男 (1964) 「扇風機」『うえの』 63
永井龍男 (1976) 『身辺すごろく』 新潮社
永井龍男 (1991) 『東京の横丁』 講談社
永倉万治 (1990) 『昭和30年代通信』 筑摩書店
仲田定之助 (1964) 『下町っ子』 新文明社
橋川文三 (2007) 『日本の百年4 明治の栄光』 筑摩書房
秦郁彦 (2018) 『実証史学への道』 中央公論新社
服部龍二 (2015) 『中曽根康弘』 中央公論新社
林えり子 (1991) 『宵越しの銭 東京っ子ことば』 河出書房新社
藤久ミネ (1980) 「若者ことば」の考現学『言語生活』 343
本間千枝子 (2011) 『セピア色の昭和』 岩波書店
松本三之助 (2007) 『日本の百年2 わき立つ民論』 筑摩書房
間宮厚司 (1993) 「若者言葉について」『国文鶴見』 26
三浦朱門, 寿岳章子, 松村明, 倉島節尚 (1989) 「国語の辞書の話〈下〉」『三省堂ぶっくれっ
と』 78
三国一朗 (1965) 「おあいにくさま」『暮しの手帖』 82
武藤康史編 (2001) 『明解物語』 三省堂
村上元三 (1980) 『六本木随筆』 中央公論社
村島健一 (1965) 「世につれ流行語の二十年」『潮』 62
柳田邦男 (1980) 「蚤を知らない世代へ」『放送文化』 35-7
柳田邦男 (2002) 『言葉の力, 生きる力』 新潮社
山本夏彦 (1976) 『笑わぬでもなし』 文芸春秋社
結城昌治 (1986) 『明日の風』 朝日新聞社
吉村昭 (1979) 『蟹の縦ばい』 毎日新聞社
吉村昭 (1998) 『わたしの流儀』 新潮社
巖山政道 (2006) 『日本の歴史26 よみがえる日本』 中央公論社
渡辺実 (1997) 『日本語史要説』 岩波書店